プリンティングディレクターの仕事とは

《印刷・プリンティングディレクター》

髙柳　昇

色の翻訳者として

プリンティングディレクターの仕事は一言で言うならば「色の翻訳者」です。

写真家が写真を撮るという行為においては「真を写す」だけではなく、今日では表現としての領域がますます大きくなっています。最近写真集を上梓（じょうし）したある写真家は「被写体と向き合うことは自身と向き合うことであり、一枚の写真に物語を描いている」と述べています。写真は写真家の精神性を表現する手段にほかならないということです。写真は動画に比べて情報量を伝えるという手段では劣ります。しかし写真という静止画は一瞬の時間を切り取ることにより、表現者（写真家）の表現意図を的確に鑑賞者に伝えやすいともいえます。

その写真家の色表現に対するこだわりをどのように印刷で表現するのか。これに対する答えを導き出すのが、プリンティングディレクターの仕事であり「色の翻訳者」たるゆえんです。

光の三原色と色の三原色

色を再現する場合、光の三原色であるRed（赤）、Green（緑）、Blue（青）で表す加色混合（３色全て重なると透明になります）と、色の三原色であるCyan（藍）、Mazenta（紅）、Yellow（黄）である減色混合（３色全て重なると黒になります）があります。デジタルカメラで撮影された色は光の三原色であるR、G、Bで発色され、印刷は色の三原色であるC、M、YとK（補色としての黒）で発色されます。

この発色方法の違いにより、どのようなことが起きるのでしょうか。最大の問題は色の三原色（C、M、Y＋K）で表現できる色は光の三原色（R、G、B）で表現できる色よりもかなり少ない（演色領域が狭い）という事実があります。これはデジタルカメラで撮影した色には印刷では発色できない色が多々あるということです。また、印刷用紙にも数多くの種類があります。用紙の白色度（白さ）や用紙表面の平滑度（ツルツル度合）によっても色は違って見えます。色を見る環境（PCの違い、室内照明の違い、明るさ）によっても色は違って見えます。

プリンティングディレクターの仕事

では、プリンティングディレクターはこの違いに対して、色の翻訳者として、どのように対応するのでしょうか。

わかりやすくするため前提となる３つの問題点を列記しておきます。

①RGB（光の三原色）の色と比べて印刷のCMYK（色の三原色）の色は表現できる色が少ないです。
②さらに印刷のインキは完全な透明インキではありません。わずかに濁っています。そのために特に鮮やかな色がうまく発色できません（例；新緑の黄緑、明るい緑、透明感のあるブルー、赤、ピンク等）。
③印刷用紙も種類がたくさんあり、印刷用紙の違いにより、発色は微妙に異なります。その手触りの自然さから、最近人気のある微塗工紙の場合はさらに色は濁りやすくなります。

プリンティングディレクターは黒子です。最初に、写真集であれば、写真集全体の仕上がりイメージを聞くことから始めます。例えば、色は「軽やかに」「光を強調」「ボリューム感を大切に」「空気感を感じるように」等々です。当然ですが写真家の表現の意図は一人ひとり異なります。プリンティングディレクターは可能な限り表現者の要望を丁寧に聞き取り、経験値に照らし合わせ、製版方法と印刷の色イメージを慎重に設計します。

その上で、①の問題に対応するため、写真のポイントを見極め、１枚の写真の中でどの部分をデフォルメ（強調）するか決めます。デフォルメの良し悪しが印刷の品質を決定します。

②の問題に対処するためには、読者の方々が印刷を見たときに「濁り」を「コク」として感じられるよう製版方法を調整します。インキの「濁り」は色の「コク」と表裏一体です。

③の問題に対処するため、印刷用紙の違いを加味して製版、印刷設計に微妙に変更を加えます。

これらの問題点に正確に対処することで、写真の実体感や臨場感を引き出すという印刷の最大の長所を生かすことが可能になります。

写真１　写真家・デザイナーとの色校正打ち合わせ

写真２　50倍のルーペで校正刷りの網点（あみてん）を確認

表現者としての製版・印刷を

写真家が写真を撮る行為において、表現としての領域がますます大きくなっている現状の中で、プリンティングディレクターも「表現者としての製版、印刷」を追求することが必然であり、写真家の表現をより正確に汲（く）み取ること、そして、その色を製版、印刷で正確に再現する技術を磨き続けることがますます重要になります。印刷にゴールはありません。たゆまぬ精進を重ねて、微力ですがこれからも写真文化の発展に寄与できればと願っております。

（たかやなぎ・のぼる＝株式会社東京印書館統括プリンティングディレクター）

写真３　印刷直前に責了紙と本刷りを比較